

ORは科学か？

「科学と技術」という言葉がある。「科学」は真理の探求が目的であって、それが何の役に立つかはどうでもよい。探検と同じで、誰も踏み込まなかった領域へ入って、人の知らなかったことを発見し、その普遍性を示ささえすれば、その価値が評価される。たとえば“毎日ミカン7000個食べると癌になる”ということを発見したとする。それは学会で堂々と発表もできるし、新聞種にもなるだろう。1日で7000個を食べるには、12秒につき1個を夜昼の区別なく食べなければならないとか、癌になる前に腹痛でダウンするだろう、といった心配はどうでもよいのである。

しかし、「技術」は科学で発見されたものを現実のものとして実現させ、その効果が認められてはじめて評価されるものである。探鉱の結果、大量の金が埋まっていることを発見しても、それを得た時の価値よりも安い経費で採掘することが不可能であったならば、それは絵に描いた餅にすぎない。

「OR」の価値はどこに見出されるのだろうか。“頭の体操か”、“学生を教育するための教材か”、“新しい考え方の習得か”。ORは技術と同じく、現実の問題に適用され、効果をあげてこそ価値を認められるものである。いくら独創的で高尚な論文であっても、架空の前提が多くて非現実的なものや、むずかしすぎて一般人の理解を得られないものは、科学としての価値はあっても、ORの実践の場では遊戯以外のなものでもない。たとえば泥棒が空家に入っても100万円、警戒の厳しい家に忍び込んでも100万円の稼ぎならば、よほどのヘソ曲りでないかぎり空家のほうを選ぶだろう。

シミュレーションなどは誰にでも理解できて、ORの道具として最も有効なものであると思う。わかりやすいが故に、実践的に大きな効果をあげた事例であっても、“学問的にどういう価値があるのですか”、“学会で発表するほどのことですか”と馬鹿にされるようであってはならない。科学としての評価に偏ってはならない。

OR学会も25歳、そろそろORが実学であるという原点を見直す必要があるのではなからうか。

ORは何も、むずかしい手法ばかりが大切なのではな

い。ORを実践する者にとっては、データを集める力、データを透して問題を発見する能力のほうが大切なのである。その力を養うには、日頃からデータを集めて分析する習慣をつけておくことが大切である。それが、いざという時にひらめくのである。

私が関係したORの事例67件について、どんな手法を応用しているか調べてみた。次の表は集計した結果である。

統計学	14.9%	CPM	1.5%
LP	6.0	SD	1.5
待合せ理論	6.0	シミュレーション	46.3
DP	4.4	産業連関表	4.4
PERT	3.0	情報理論その他	10.5
確率論	1.5		

シミュレーションの約46%が最も多い。シミュレーションには特に定められた方法はない。また統計学や確率論についてはORだけに限定されるものではない、広く一般的に使われているものである。こうしてみると、手法というものにお世話になったものは約37%で、それ以外の約63%は、ただデータをとり、その中で規則性をつかみ解決したということである。

われわれが毎日のように接している地下鉄の社内広告をとりあげても実に面白い。広告は1車輛で74枚掲示され、窓ガラスを除けばほとんど広告に使われている。もっとも、床と天井と座席は別だが、窓ガラスにも“ドアに注意”とあって、その下に“注意1秒、怪我は一生。〇〇生命保険”と書いてあったり、乗車中は広告の中に人間が埋まっているのである。

その広告のシェアが季節によって変わる。ボーナスの時期になると金融関係のシェアが大きくなり、秋になれば結婚式場、化粧品は春夏秋冬それぞれの宣伝に余念がない。ぼつぼつコンピュータの何かが出ていいのに、とと思って注意していると、××専門学校プログラマー・コースとか、広告の文句の中に“貴男の嗜好をコンピュータで管理しています”などと書かれている。

科学のORも結構、しかし実践するに当っては力まずにデータをとる習慣のほうが大切である。(M. M.)